

ウィズコロナ・ポストコロナの初年次教育¹

課題研究担当理事 山田礼子

【企画趣旨】

本課題研究は、課題研究委員会が設定したテーマに基づき、昨年度より開始した公募により登壇者を選定するという方法により、初年次教育を実践されてきた経験を通じての好実践や研究成果から、これからの初年次教育や大学教育の在り方を考えつつ、課題発見から課題解決につなげることをめざし、昨年度と今年度の2年間を通して本テーマを取り上げた。

新型コロナウイルス感染症(以下 COVID-19)が世界中で拡大し、WHO (World Health Organization, 世界保健機関) が2020年3月11日に世界的流行としてパンデミック状態であることを宣言して以来、世界は COVID-19 の影響を受けた。この間ワクチンが開発され、学校・高等教育も従来のオンライン授業一辺倒から対面授業へと戻り、5類相当に移行したことにより、ニューノーマルあるいはウィズコロナという新たな状況のなかで、人類はポストコロナの生活を考えることが求められている。経済活動への影響はもとより、高等教育機関へのこれまでの未曾有のコロナパンデミックの影響は甚大かつ計り知れない。とりわけ、コロナ世代と呼ばれる2023年度に大学4年生になる世代は、入学時からオンライン授業が標準的な授業形態でもあり、かつ部活動や正課外での活動も極めて経験することが限られていた。高校時代にコロナ禍を経験した世代が大学にすでに進学し、こうした世代の過去の経験に対していかに初年次教育が対応するかも新たな課題である。

従来、初年次教育は、高校から大学への円滑な移行を支援するための教育として、学業面での移行のみならず、新入生の自己肯定感を向上させ、大学というコミュニティへの帰属意識を持たせることで、人間関係を円滑化することをも目的とし、実際に寄与してきた。それゆえ、初年次教育がほとんどの高等教育機関で普及し、プログラムとして構築されてきた理由でもあった。

しかし、COVID-19 拡大により、従来対面型でこうした機能を充実させ、貢献してきた初年次教育が、果たしてオンラインが中心となる状況において、どれだけこうした機能を果たし、新入生を導いているかについての研究やグッドプラクティスの蓄積もほとんどみられない。また、オンラインテクノロジーやDXの発達によりこうした初年次教育の機能をどれだけ果たしているかというデータも提示されていない。ポストコロナにおいて、規制が緩和されたとしても、従来通りの大学の姿に戻ると予想できないとすれば、現在のウィズコロナの状況において、初年次教育が、いかに新入生の自己肯定感を支え、心理的安定に寄与し、将来への確実なプランを立てるかなど、今後の新入生が充実した大学生活を送るうえでの鍵となると思われる。

¹ 本稿は2023年度初年次教育学会大会要旨収録に掲載した趣旨を若干加筆・修正している。

そこで、グッドプラクティスだけでなく、研究としての蓄積にもなるような内容を深めていくことを目的として、課題研究グループでは、2年間にわたってこのテーマを扱い、学会としてこの課題に取り組むことにし、本年度は2年目の試みとなる。1年目には、三つの取り組みが選定され、大会シンポジウムで報告され、学会誌に掲載されるという成果につながっている。課題研究委員会としては、今後の学会活動を担っていく人材を発掘するということに鑑みて、本テーマやサブテーマに関連して研究を行っている、あるいは実践を行っている話題提供者を公募するという形で発掘することにした。その結果、本年は香川大学の山中隆史氏、桃山学院大学の高良要多氏、関西国際大学の田中亜裕子氏が登壇者となり、その後関西大学の山田剛史氏による3名の発表に対してコメントが行われ、活発な質疑応答が交わされた。本シンポジウムの企画の趣旨に沿った内容となったといえよう。